

骸骨ビルの庭

宮本輝

下



講談





講談社文庫

常州大学図書館
藏書章
骸骨ビルの庭(下)

宮本 輝

講談社

〔著者〕宮本 輝 1947年兵庫県神戸市生まれ。追手門学院大学文学部卒。'77年『泥の河』で太宰治賞、'78年『螢川』で芥川賞、'87年『優駿』で吉川英治文学賞をそれぞれ受賞。'95年の阪神淡路大震災で自宅が倒壊。2004年『約束の冬』で芸術選奨文部科学大臣賞、'09年本作で司馬遼太郎賞をそれぞれ受賞。著書に『道頓堀川』『錦繡』『青が散る』『避暑地の猫』『ドナウの旅人』『ひとたびはポプラに臥す』『睡蓮の長いまどろみ』『焚火の終わり』『草原の椅子』『森のなかの海』『星宿海への道』『にぎやかな天地』『宮本輝全短篇』（全2巻）など。ライフワークとして「流転の海」シリーズがある。近刊に『三千枚の金貨』『三十光年の星たち』『慈雨の音——流転の海 第六部』。

がいこつ にか
骸骨ビルの庭(下)

みやもと てる
宮本 輝

© Teru Miyamoto 2011

2011年12月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277022-4

目次

骸骨ビルの庭（下）

5

解説 中村文則

308



講談社文庫

骸骨ビル の 庭 (下)

宮本 輝

講談社

目次

骸骨ビルの庭（下）

5

解説 中村文則

308

骸骨ビルの庭（下）

平成六年四月二日

きょうは土曜日。アオヤマ・エンヴァイロメントは休日だが、朝の十時過ぎにN部長から電話があり、宇田川典国の自殺によつて状況が大きく変わったことを告げられる。

杉山ビルディングの新しい所有者となつた不動産会社は、宇田川典国とともに杉山ビルディングの土地の売却の内金を受け取つたはずの五人に、早急に養子たちへの相続税分の支払いを履行するよう促したが、五人は土地売却の内金を全然受け取っていないことが判明したという。

宇田川典国が着服したのだが、それは彼等の事情であつて、不動産会社とは関係がないことだ。相続税分の支払いが履行されて住人が完全に立ち退かなければ、契約は完全に遂行されたことにはならないので、不動産会社は土地代金の三十パーセントし

か支払っていない。その残り七十パーセントから不動産会社が相続税分を充当して支払うと決めたが、そうなれば、茂木泰造たちの立ち退きに猶予は与えられない。不動産会社は速やかにマンション建設に着手する。その旨を正式な文書として発送する前に、茂木たちと話し合いを持ってくれ。

これがN部長からの電話の骨子だった。

私は、不動産会社がいつまでに茂木たちの立ち退きを求めているかとN部長に訊いた。五月末までにといいことだ、とN部長は言った。

不動産会社の要求を茂木泰造に伝えると言ってから、それをきょうにも伝えたら自分の仕事は終わったことになるので、この骸骨ビルの一階の部屋で暮らす必要もなくなるが、どうすればいいかと訊いた。

「私のこのビルで一カ月ちよつとのひとり暮らしは何の意味もなかったということになります。そんなことはたいした問題ではありませんが、茂木泰造たちを強硬に立ち退かせたあとの、杉山ビルの解体工事、その跡地での新しいマンション建設工事、そしてその後のマンション分譲と管理に厄介な問題が生じてきます。それはM不動産ではなく、アオヤマ・エンヴァイロメントに直接ふりかかっています」

私の言葉に、きみの仕事は終わっていないとN部長は言った。ことし一杯で円満に

という計画が五月末日までと短縮されたただけだ、と。

一年待とうが十年待とうが、茂木泰造の気が済むわけではない。桐田夏美は、阿部轍正に幼児のときから長い年月、性的暴行を受けつづけたと生涯言い張りつづけるであろう。彼女の訴えが真実かどうか、いまとなつては彼女以外誰も知らない。茂木泰造もそれはよく承知している。しかし、茂木が杉山ビルディングから出て行かないのは、子供が駄々をこねているのとは少々異なる。彼には何かやり遂げたいことがあるのだ。そのために時間が欲しいのだ。自分はそんな気がしている。

私がそういうと、N部長は少し考え込んでから、

「八木沢くんは、杉山ビルに絡んできた暴力団のことも、その理由も、まったく私に訊こうとはしないけど、なぜだい」

と訊いた。

「私にとっては雑音になるだけですから」

とだけ私は答えた。N部長は、私が大方を把握していることに気づいているのだ。彼は多くを語らず腹芸ができる。そしてなぜか私を信じてくれている。

私は電話を切ると、茂木泰造の部屋に行った。茂木は私を部屋に招き入れ、読んでいた本を閉じた。時代物の電熱器の赤く熱したコイルの上にアルミのヤカンが載せら

れ、そこから湯気が立ちのぼっていた。

「懐かしいですねエ。いまや貴重な骨董品ですよ。子供るとき、この電熱器で、おばあちゃんが餅を焼いてくれました」

私がそう言うと、茂木は微笑みながら、ヤカンの湯で茶を淹れてくれた。私は、いま上司から電話があったと言い、その内容を茂木に伝えた。

「宇田川が死んだと知ったとき、いよいよ立ち退きを迫られるやろと思いました」と茂木は穏かな口調で言った。

「桐田夏美とお逢いになりましたか？」

「消息不明のままです。夏美も宇田川に騙されて、せいぜいはした金を分けてもらっただけで、アテが外れてうろたえてることでしょう」

私は、桐田夏美が金目当でやったことではなかったと思うと言った。

「そうです、何かに対する私怨です。その何かが、いったい何なのか……」

「この骸骨ビルの子供たちのなかで、阿部轍正さんと茂木泰造さんに最も愛される子でありたかったのかもしれないですねエ」

茂木泰造は、そうかもしれないとつぶやき、私に茶を勧めた。

「その、可愛がられよう好かれようとする心が、少しずつあの子をねじ曲げていきま

した。そやけど、このビルで育った子供たちは、みんなそういう時期があつたのです。無理ありません。みんな本当の自分の親の愛情を受けてないんですから。この茂木泰造と阿部轍正にうとんじられたら、もう誰にすがる術もなかつたんですから」

そう言つて、茂木は視線を窓の外に向けた。私には茂木が昔のさまざまな出来事を思い浮かべているように見えた。

「あの子たちが小さかつたころは、私も阿部もまだ若くて、未熟な親でした。これも無理はありません。ふたりとも人の親になつたことはなかつたんですから。子供たちに対して心が至らんかつたことはたくさんあります。ああ、あのときあんな言葉を使うんやなかつた、とか、あんな叱り方をしてはいかんかつた、とか、思い出すと反省せないかんことがぎょうさんあります」

私は茂木がそれきり黙り込んでしまつたので、しばらく間を置いてから、あなたはどうぞすれば気が済むかと訊こうとした。桐田夏美は自分が嘘をついたとは決して言わないであろう。ならばどうやって阿部轍正の冤罪を晴らすのか、と。

しかし、私が口を開く前に茂木はこう言つた。

「私は、夏美をこの骸骨ビルにつれて来たいのです。夏美が耕やし、種を植え、野菜を収穫した畑の跡に立たせたいのです。比呂子や聖子たちと寝起きた一階の部屋に

いまでも貼ったままの夏美の絵を見せたいのです。それを見てあの子が万感の思いに包まれ、自分の嘘を認め、謝罪して泣き崩れる、なんてお涙頂戴のテレビドラマのよくなことを期待してるんやおまへん。そうすることで夏美に何かを期待することなんかひとつもありません。私はただもう一度、夏美をこの骸骨ビルのなかに、庭の畑の跡に立たせたいのです。夏美に、パンツが丸見えの短かいスカートを穿いて走り廻ってた幼なかつたころの自分の魂魄こんぱくを見せたいのです」

「魂魄、ですか……」

私はそうつぶやき、熱い茶を飲みながら、茂木の健康を取り戻した顔を見つめた。

「力づくで拉致してつれて来るわけにはいきませんねエ。そんなことをしたら、私も茂木さんも誘拐罪で警察に逮捕されますよ」

冗談めかして笑顔で言いながら、私は桐田夏美の居場所を捜そうかと本気で思った。

「その茂木さんのお気持を、いま骸骨ビルにいる人たちにお話しになりましたか」
私の問いに、茂木もかすかに微笑みながら首を横に振った。

「そんなことを私が言おうもんなら、あの子らはほんまにやりかねません。全員逮捕されて、天下の笑い物や」

そう言つて茂木はスリッパを脱ぎ畳の上を歩いて窓のところに行くと、私が掘つた土のあたりに視線を向けた。

「いまは便利になりました。園芸店に行くと、袋詰めした堆肥を売ってます。無農薬の有機堆肥がね。それを五袋くらい買^いうてきて、耕した土に混ぜるんです。それが終わつたら、枝豆用の大豆の苗を持って来ましょう。ついでナスビもどうですか？ 穫れたてのナスビを焼いたら、たちどころにうまい焼き茄子の出来上がりです。新鮮なナスビが、夏の暑さで疲れた体にどれほど効くかがわかります」

私には茂木の言葉が、そのナスビを収穫して食べるまでは自分たちはここから出て行かないという宣言に聞こえた。

この道理をわきまえた老人をかくも意固地にさせているものとは何だろう。阿部轍正に着せられた汚名をそそぐ？ 桐田夏美をもう一度この骸骨ビルの庭に立たせる？

いったいそれが何になるというのだ。阿部轍正を知る人は、彼の身の潔白を疑わないであろう。見る人はちゃんと見ているし、どつちが白でどつちが黒かもわかつている。わからない者たちには、これでもかと真実を見せても、なおわからないのだ。

まだ四十七歳にすぎない小僧だが、私も二十数年間、企業という大きな組織のひとつの駒として働きつづけてきて、さまざまな人を目にしてきた。組織悪の正体もある